

# ユーゴスラビアを訪ねて

入江 礼子

三年前、OME P（世界幼児保育教育機構）の第二十一回世界大会が開かれた横浜。私はそこで東欧の三人の幼児教育関係者に出会い、アテンドするチャンスに恵まれた。ブルガリアのイワン・デミトロフさんとマケドニアのオルガ・シユカリッチさん、それにユーゴスラビアのミリヤナ・

ペシッチさんである。さてこの三人のうち、ユーゴスラビアのミリヤナさんとは横浜大会以来、文明の利器であるEメールを利用してメールのやりとりを続けていた。そして、ついにOME Pの世界大会直前に彼女の国ユーゴスラビアを訪ねるチャンスが訪れた。

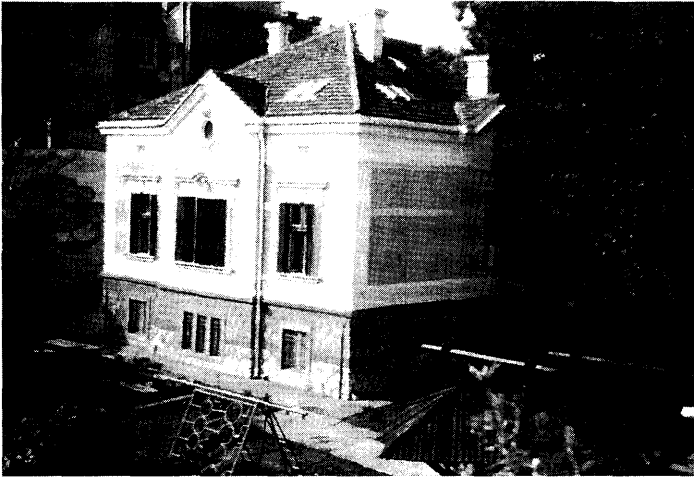
ところで日本からユーゴスラビアには直行便はない。ヨーロッパのどこの都市を経由するほかないのである。私はバリ経由でベオグラードに入った。パリから定員が一〇〇人にも満たない小さなジェット機の機窓から見えた空港はシーンと静まりかえており、目に飛び込んできたのは軍用ヘリコプターの並ぶ姿だった。国際線といっても私が着いた時間に他の飛行機の着陸はなく、パスポトコントロールでの入国審査も、これまたこわいほどの静けさのなかで行われた。一国の首都にある空港でのこの姿は、現在のユーゴスラビアの状況を暗示しているようにも思われた。

しかし通関手続きを終えて出迎えロビーに出ると、一転してそこにはタクシীর客引きがあふれかえっていた。三年ぶりのミリヤナさんも、以前と変わらずとても元気そうだった。ご主人のヤン

コさんと一緒に出迎えてくれ、いよいよ彼女たちの家に向かうことになった。しかし空港の駐車場で目にしたものは……。アメリカのようにぴかぴかの新車と、走っている間に壊れてしまうのではないかと心配になるような中古車が入り交じった光景でも、日本のように新車と見まがうほどに磨き上げられた中古車の姿でもなく、駐車してある車という車はすべて使い古しという言葉がぴったりの中古車という光景だった。タクシীরも同様。新車のタクシীরなど一台もなかった。ここで私はこの国がボスニア戦争に連動して国連の経済制裁



◀ベオグラード中心街近くに建つヴェイラ幼稚園  
もともと幼稚園として建てられたものではない



を受け、経済的にかんりのダメージを受けているという、以前ミリヤナさんからもらった情報を出した。経済制裁は終わったものの、その後の政治情勢や経済情勢は決して樂觀を許さないものであることを、この空港に降り立ったことで肌を感じた。

こういう地域でいたい子どもたちはどんな子ども時代を過ごしているのか、あるいは幼児教育がどう行われているのかについてはミリヤナさんの横浜のOMEP世界大会のときに発表された論文に詳しい（その一部を『幼児の教育』第九十五巻七号に「ユーゴスラビアの保育の現状と子どもたち」と題して紹介させていただいた）。

その論文と彼女の話から、ユーゴスラビアでは子どもたちの住んでいる地域によって教育格差が大きいことが想像できた。主にボイボディナ自治

州をはじめとする北部地域は豊かな穀倉地帯を持ち、工業も発展していることを背景に、生活が豊かであり、幼児教育の普及度も高い。またベオグラードなどの大都市部の新興住宅地でも近代的な核家族を中心として教育に対して関心も高く、ここでの子どもたちの生活は日本や他の欧米諸国の子どもたちの生活と良きにつけ、悪しきにつけ大差はない。一方、この二つと対極をなすのが山間部となっている南部地域であり、その最たるものが今紛争が起こっているコンゴボ自治州なのである。ここでの幼稚園就園率はわずか五パーセントである（一九九五年資料）。ボイボディナ自治州のそれが九十パーセントを超えることを考えると、その格差に愕然とする。

この格差をこの目で見たかったのだが、コンゴボが紛争地域になっていることもあり、そこを訪ね

ることはできなかったが、ベオグラード市内にあるヴィラ幼稚園での見学をさせていただいた（ヴィラ幼稚園については前掲の『幼児の教育』誌に少し紹介させていただいた。ここはミリヤナさんが約二十年にわたって、この園の保育者と共に実践研究を続けられた場である）。この園の建物は幼稚園として立てられたものではない（何か別の目的で建てられた建物が、幼稚園や学校として使われているケースはほかにもあった）。

門から園庭に入ったのだが、ここにはこの国のある意味では殺伐とした状況が嘘のように、暖かいものが流れていた。まず、保育者がゆったりとしている。日本のようにまめまめとは動き回っていない。子どものなかに入り込んで遊んでいるというでもない。保育時間中に園庭にしつらえてあるピクニックテーブルで保育者の方々とお茶をいただきながらそんなことを思った。そのまわり



▲人形劇遊びのときに使うという等身大の人形  
ここは劇遊びがとても盛んである

では子どもたちが私が日本から持参した林明子さんの絵本「はじめてのおつかい」の表紙にトレーシングペーパーを当てて、日本の「字」を書き写していた。ちょうど、おかあさんのまわりで子どもたちがちよこちよここと遊ぶように。

この園では人形劇などの劇遊びが盛んで、一年間をかけて子どもたちを中心にドラマを製作し、最後には皆で楽しむというようなプロジェクトを毎年のようにやっているということだった。このドラマの要素をふんだんに取り入れているやり方は、ブルガリアをはじめとする東欧地域で人形劇などがとても盛んなことと無関係ではないのかもしれない。保育者のひとりのヤドランカさんはこのプロジェクトのなかで子どもたちが作った台本を見せてくださった。子どもたちがベースにしたのは「ヘンゼルとグレーテル」のお話だったが、至るところにこの幼稚園で生活する子どもたちの姿が溢れている。

た。ヘンゼルとグレーテルの住所もヴァイラ幼稚園の住所になっていた。

また唯一の男性保育者であるヴァーニャさんは二十人の三〜五歳の子どものたちのグループを持っていると言っていた。彼には「日本の幼稚園にはコンピュータがいっぱいあるのか？」ときかれた。「えっ」とびつくりした私にミリヤナさんが助け舟を出してくれた。「あれは日本の産業界の話よ。ほとんどの幼稚園はまだコンピュータにまみれてはいないわ」。これと同じ質問は、のちにOMEPの世界大会の会場でも、パレスチナの人から受けた。ここで私は保育者同士の国をまたがった交流の大切さを感じた。聞いたり読んだりするだけではわからないことも一目見るだけで、あるいはその場に身を置くだけで分かることがある。お互いに交流するチャンスがあれば理解はもっと深まる。と同時に日本の保育に関すること

も、今は世界の共通語に近くなっている英語で流す必要があるのではとも思った。そうでなければ日本の保育に関することが彼らの目に止まるチャンスはとてまもなくなくなってしまう。現在、日本の情報として世界に流れていることは圧倒的に産業や産業技術に関することが多い。その情報しか持たない人は、そこから日本の保育の状況を類推するしかないということになる。

ユーゴスラビアに入学してから、日本との状況の違いに圧倒され続けていた私だったが、幼稚園に足を踏み入れた瞬間からその緊張が溶けていく



のを感じていた。なにやかやと話しかけてくる子どもたち。なにしろセルビア語なので、ミリヤナさんやらドランカさん、それにバーニヤさんの助けをかりなければ分からないことも多かったが、子どもたちが来客があることでちよつぱり興奮しているのがよく分かったし、なんにでも興味を示すその好奇心にとても子どもらしさを感じ、私もちよつぱり興奮し、そしてリラックスしていった。

そういう子どもとの関係で溶け出すものがあった反面、最後まで溶けなかったもの、それは先程も述べた「おとなと子どもの関わり方」に関する違和感である。一昨年ドイツを訪ねた折にも感じたのだが、どうも「おとなと子どもの関わり方」ということに関しては、ヨーロッパ（このように大きく括ってよいかどうかは疑問の残るところで

あるが）と日本とでは大きく違う。「保育」という和語が欧米の『Early Childhood Care and Education』には訳しきれない秘密は（こいらへんにあるのかもしれない。こればかりは、その場に身を置かなければ感じとることができないものだが、この問題をもっと突っ込んで考えていくことが私に課せられた課題と思わされたユーゴスラビア、OMEPP世界大会への旅であった。

（鎌倉女子大学）